新任教職員に期待するもの

奈良県教育委員会
教育長　吉田育弘

１　はじめに

皆さんが奈良県公立学校教職員として採用されましたこと、心よりお祝い申し上げます。本年度、新たに 348 名の皆さんを私どもの後輩として、また「チーム奈良県」の一員としてお迎えすることができ大変うれしく思います。皆さんも気持ちを新たにして本日を迎えられたことと思います。これから子どもたちの育みを支える教育という大きな役割を担うことへの責任をもち、日々を過ごしていただくようお願いします。

２　これからの社会に向けて

さて、これからの学校教育において、私たちは、子どもたちにどのような力を付けなければいけないのでしょうか。子どもたちにどのような力を付けることが必要なのかを考えるときには、これからの社会がどうなっていくのかを考える必要があります。

昨年開催された 2022 FIFA ワールドカップ カタール大会について、記憶に新しい方も多いと思います。本大会の日本代表の監督を務めた森保一氏が目指したのは、「強豪相手にも自分たちの意思をもって主体的に戦えるチーム」でした。結果、日本代表は、優勝経験のあるドイツとスペインを破り、グループ首位で２大会連続となる決勝トーナメント進出を果たしました。素晴らしい結果を残した日本代表は、森保監督が目指した「自分たちの意思をもって主体的に戦えるチーム」であったと言えるのではないでしょうか。

皆さんは、これまでも「主体的」という言葉を、何度も耳にしてこられたと思います。改めて「主体的」の意味を調べると、「他に強制されたり、盲従したり、また衝動的に行ったりしないで、自分の意志、判断に基づいて行動するさま。」と記されています。

「人間の仕事の多くがＡＩ(人工知能)に代替される社会はすぐそこに迫っている。」と述べている学者がいます。しかし、ＡＩは過去に基づいた状況判断はできても、自分の意志、判断に基づいて行動すること、つまり、主体的に行動することは苦手です。例えば、学校では、柔軟性を働かせて問題を解決しなければならない場面が多々あります。その場の状況判断がとても大切になってきます。教職員の仕事は、ＡＩが代替できる仕事と言えるでしょうか。

めまぐるしく変化する社会において、予測困難な時代だからこそ、目標や課題を自ら設定し、主体的に問題解決に取り組む力がより一層求められます。これは、私たち教職員にとっても、子どもたちにとってもとても大切な力です。この大切な力を育んでいくために、私たち教職員は、どのようなことに取り組まなければならないのでしょうか。このことを真剣に、そして主体的に考えていかなければなりません。皆さんにも、ぜひじっくりと考えてほしいと思います。

３　主体的な学びを支援する伴走者として

昨今、特別支援学校や小・中学校等の特別支援学級に在籍する児童生徒、小・中・高等学校等の通常学級に在籍しながら通級による指導を受けている児童生徒数は年々増加しています。また、特定分野に特異な才能のある児童生徒や日本語指導を必要とする児童生徒、ヤングケアラーと呼ばれる家事や家族の世話を日常的に行っている児童生徒も在籍しています。

このような状況下において、教師一人一人が、個々の児童生徒の多様な教育ニーズに対応した学びを提供することが、今後ますます必要となるとともに、全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの充実を通じて、「主体的・対話的で深い学び」を実現していくことがさらに求められます。

また、令和４年 12 月に出された文部科学省の中央教育審議会答申では、教師及び教職員集団の理想的な姿として、「学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての役割を果たしている。」と述べられています。

「伴走」とは、ランナーの傍について一緒に走ることです。特に、ブラインドマラソンにおいては、伴走者は視覚障害のあるランナーと一緒に走り、視覚障害者の目となって方向を伝えたり、障害物を避けたりする役割があります。パラリンピック等の陸上競技で、ランナーと一緒に走る伴走者の姿を目にした人もいるのではないでしょうか。ランナーを支える伴走者は、ランナーの安全を第一に考え、半歩から一歩リードするような形で進みます。ランナーがリラックスして走れるように、日頃からコミュニケーションを十分とることが、安全に安心して走ることにつながるそうです。つまり、伴走者はランナーのパフォーマンスを最大限に引き出す役割を担っているのです。

このことは、先に述べた「子供一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての役割」と通ずるのではないでしょうか。学校は子どもたちにとって学びの場であるとともに、安全に安心して過ごすことのできる居場所でもあります。一方的な指導であったり、子どもたちや保護者の思い等を十分に理解しないまま対応をしたりしていると、よりよい関係を築くことはできません。また、子どもたちは安心して学校で過ごすこともできません。伴走者としての教職員は、全ての子どもたちの可能性を最大限に引き出し、子どもたち一人一人が自分自身のよさや強みを生かして、充実した学びを深められるようにすることが求められます。そのためには、教職員が子どもたち一人一人の心に寄り添い、深い信頼関係を築くことがとても大切です。みなさんが、ブラインドマラソンの伴走者のように、子どもたちと学びのゴールを共有し、「先」をしっかりと見据え、子どもたち一人一人の「学ぶ力」と「生きる力」をはぐくむ「本人のための教育」を実現する教職員として活躍されることを期待しています。

４　子どもの心に火を付ける

有名な教育学者ウィリアム・アーサー・ワードの言葉にこんな言葉があります。「平凡な教師は言って聞かせるだけ、よい教師は説明ができる、優秀な教師は自らそれをやってみせる、最高の教師は子どもの心に火を付ける。」

皆さんにとって、「記憶に残る先生」とは、どのような先生ですか。うれしいときに共に喜んでくださった先生、辛いときに優しく寄り添ってくださった先生、悔しいときに共に涙を流してくださった先生、時に厳しく指導してくださった先生。これまでの先生方との出会いにより、教職を目指した方もいるのではないでしょうか。子どもたちにとって、先生との出会いは、その生涯に大きな影響を与えます。そのときすぐに結果として表れなくても、成長した子どもたちの人生に生きている「教え」があります。

もちろん、子どもの心に火を付けるのは、担任をしたり、授業を担当したりする者だけでなく、養護教諭、栄養教諭、学校事務職員そして実習助手の皆さんもです。そして、それぞれが、それぞれの専門性を生かして、子どもたちと積極的に関わることが、学校全体として子どもの心に火を付けることになるのです。それが実現できるのは、ＡＩではなく、人間であり、我々教職員なのです。皆さんの言葉や行動、人間力によって、だれ一人取り残すことなく、子どもの心に火を付ける、そんな教職員になってほしいと願っています。

子どもの心に火を付けられる教職員になるために、大切にしてほしい三つのことがあります。

一つ目は、子どもたちに対する愛情です。子どもたちは豊かな可能性をもち、その可能性を最大限に発揮したいと願っています。子どもたちの可能性を引き出し、子どもたちの心に火を付け、その可能性を発揮させていくためには、子どもたち一人一人に愛情をもって寄り添うことがとても大切です。伴走者である教職員の深い愛情が、全ての子どもたちの活力となり、生きる喜びへと繋がっていくのです。

二つ目は、コミュニケーション能力です。その中でも特に大切な力は、聞く力です。伝える技術は経験や研修を重ねるうちに上達していくと思いますが、相手の話をよく聞いて、素直に、そして謙虚に受け止め、自身の成長につなげる姿勢を大切にしていかなければ聞く力は成長しません。「話し上手は聞き上手」ということわざのように、人の話をしっかり聞ける人ほど魅力的な話ができ、人の心に火を付ける人物となるのです。

そして、三つ目は、自らが学ぶ姿勢をもつことです。めまぐるしく進展する社会において、学校教育を取り巻く環境も著しく変化しています。そのような状況下において、身に付けた知識やスキルをさらにアップデートしていくことがますます必要です。教職員自身が、学ぶ心や学ぶ姿勢をもっていなければ、主体的な学びを支援する伴走者としての役割を果たすことは困難です。子どもは先生の後ろ姿をよく見ています。先生の後ろ姿から子どもは学ぶのです。ですから、子どもの心に火を付けられる教職員になるために、常により高いものを目指し、あらゆる人物や書物等から学び続けてください。自分自身が「学び続けるプロ」という意識をもって、教職員として成長してほしいと願っています。

子どもの心に火を付け、その火がいつまでも燃え続けるように、教職員として精一杯取り組んでくださることを期待しています。

５　学び続ける教職員へのサポート

皆さんは、これまで夢を実現されるためにたくさんの学びを積み重ねてこられたことと思います。しかし、教職に就くことがゴールではありません。教職に就いてからも、みなさん

が自身の学びを継続させ、教職員としての資質・能力の向上に努められることを期待しています。

教職員は高度な専門職です。自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努める義務を負っており、学び続ける存在であることが社会からも期待されています。

学び続ける教職員を支援するために、奈良県では教育研究所、奈良市では教育センターを中心に、教職員を支援する体制を整備しています。教育研究所や教育センターは、皆さんの初任者研修の校外研修を実施するところでもあり、皆さんを支援する場でもあります。教育研究所では、奈良県教職員の資質向上に関する指標に基づき、初任者研修だけでなく、学校運営、学級経営や教科等指導など、さまざまな分野の研修講座を実施しており、県内の教職員の皆さんの学びをサポートしています。教育研究所に来所して受講する研修だけでなく、Web 会議システムを活用したオンライン研修やオンデマンド研修等も実施しています。皆さんの学びを奈良県教育委員会は全力でサポートしていきます。

６　辞令書・宣誓書について

辞令書について、少しお話をします。辞令書の一番上には、「あなたをここに採用する」と書いてあります。県の教育委員会は皆さんの任命権をもっています。任命権というのは採用する、処分するなどの権限をもっているということです。

皆さんは公の立場としての公務員となるわけです。今後皆さんは、公の立場で生活をしていくわけですから、当然公平でなければなりませんし、子どもの信頼を損なうことは絶対できません。教職員としての自覚と責任をもって日々の教育活動に取り組まれることを期待しています。

７　おわりに

最後に、私の大好きな物理学者アルベルト・アインシュタインの言葉を皆さんに贈ります。彼は、『晩年に想(おも)う』という著書の中で「教育とは、学校で習ったすべてのことを忘れてしまった後に、自分の中に残るものをいう。そして、その力を社会が直面する諸問題の解決に役立たせるべく、自ら考え行動できる人間をつくること、それが教育の目的といえよう。」と述べています。これは、学びの場で知識や技能を身に付けることは大切ですが、これからの社会が、どんなに変化しても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしいということではないでしょうか。

子どもは地域の将来を託すべき宝です。地域にとっても国にとっても大切な子どもたちが健やかに育まれるよう御尽力ください。

たくさんのことをお話ししましたが、職責の重さを強く感じ、教職員として務めることに不安にならないでください。困ったときには、先輩の教職員が助けてくれます。我々と共に互いを支え合いながら本県教育に携わる仲間として御自身のもてる力を存分に発揮して下さい。自分の資質・能力の向上に自ら努めるとともに、健康には十分気を付けて、奈良県の教職員として第一歩を踏み出してください。

皆さんのこれからの活躍を心から期待しています。